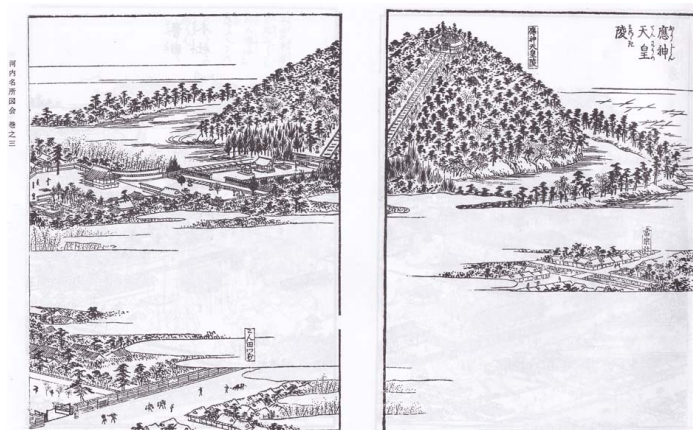


## 7. 河内名所図会を訪ねて その一 応神天皇陵

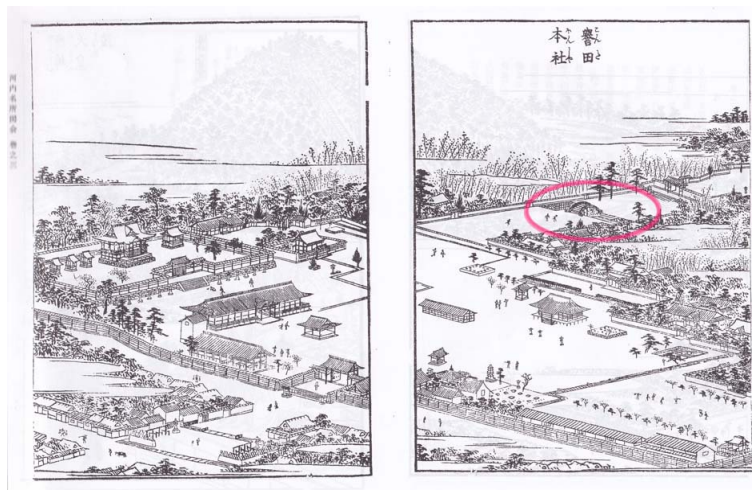
藤井寺はどんなところ？ 今はインターネットやガイドブックで居ながらにして情報を得ることができます。こうした名所の情報提供は、江戸時代後期の「名所図会」の発刊が始まりと考えられています。藤井寺あたりのガイドブックといわれたのが享和元年（1801年）発行の「河内名所図会」（文：秋里籬島、絵：丹羽桃溪）でした。名所の景観を写しながら年中行事や四季折々の風俗なども描き出し、旅の楽しさを沸立たせるようになっています。約200年前の「河内名所図会」に描かれた藤井寺やその周辺の名所が現代にも引き継がれている場所を訪ねます。



現在は、後円部北側(上辺)の前方部が遷葬所

初回は「応神天皇陵古墳」です。古くから「応神天皇陵（おうじんてんのうのみささぎ）」として信仰され、河内の名所として知られていました。藤井寺市と羽曳野市にまたがる台地の高所にあり、約1600年前の5世紀前半に建造された長さ425mの大型前方後円墳です。

図会では、高さ35m、径250mの大きな後円部頂上に六角堂（誉田八幡宮奥院）があり、それにつながる参道の両端に桜が描かれています。また、秋には神輿を奥院へ神幸する時に渡る石反橋（いしそりばし）も描かれています。残念ながら陵全体の大きさは描かれていませんが、当時はこうした景観こそが見どころであったようです。陵の周辺は、高野山へ向かう東高野街道や大坂街道がありましたので、多くの旅行者たちがお参りし、この景観を楽しんだに違いありません。大きな後円部や水を蓄えた濠や堤。現在では立ち入ることのできない墳丘の様子がわかります。また、参道に向かう入り口には祠があり、陵と誉田八幡宮との係わりもわかります。



現在は、六角堂や参道、祠は廃止され、墳丘は樹木に覆われ、図会の景観を遠望することはできません。前方部の遥拝所から外堤を歩くとその巨大さが実感でき、誉田八幡宮北側にある石反橋(放生橋)付近に立つと、図会に描かれた景観を思い浮かべることができます。江戸時代に人々が感じた陵の価値観は現代と違っていますが、1600年前の遺産を大切にし、将来に引き継ぐ気持ちは変わっていないように思われます。

(2018年12月 勝部)

(参照)秋山離島編、丹羽桃溪画、堀口康生校訂「河内名所圖會」(1975年 柳原書店)